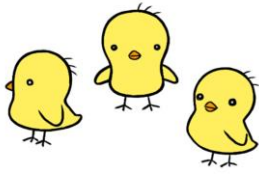


ひよこだよ



都立大塚ろう学校 乳幼児教育相談
平成30年9月4日 NO. 5

おはなし 見ているよ・聴いているよ

長い夏休みが終わり、学校に子供たちの元気な姿が戻ってきました。ひよこ・ことり組の皆さんは、どんな夏を過ごしましたか。お子さんの様々な経験や成長について、お話ししていただくことを、スタッフも楽しみにしております。

9月からも、親子で楽しい活動をたくさんしましょう。運動会や遠足などの行事もあります。体調に気を付けて、お友達みんなで参加できると良いですね。



「学校が夏休みに入ると、先生もお休みになるのですか？」と、よく訊かれることがあるのですが、子供たちが学校にいない夏休みでも、実はお休みにはなりません。この期間に、私たちは9月以降の活動の準備や打ち合わせをしたり、様々な研修で新しい知識を得たり、既知の内容を深めたり、その年のテーマに沿った研究を進めたりしています。

今年の夏も、様々な研修や研究会に参加する機会を得ることができました。その一つに、関東地区のろう学校で乳幼児教育相談を担当する教員が一堂に会する研究会がありました。そこでは、脳機能の面からの聴覚の状態と発達や、聞こえない・聞こえにくいお子さんの発達（愛着・感情・言語・コミュニケーション・自己コントロール機能などの面から）についての講演を聴くことができました。

その中で、子供の言語発達に大きく貢献する「マザリーズ」についての話がありました。マザリーズは、養育者が子供に使う特有の養育語のことです（育児語・母親語と言われることもあります）。そして、マザリーズの使い方は万国共通なのだそうです。その特徴は、「単純な文法構造をもった短い発話」「声のトーンが高い」「誇張した抑揚」「テンポがゆっくり」「同じ言葉の繰り返し」です。例えば、生後間もない我が子に向かって話しかける気持ちで、試しに下の吹き出しの中の文章を読んでみてください。

〇〇ちゃん、おなかすいたのね。
みるく ごくごくしようね。
いっぱい ごくごくしているね。
〇〇ちゃん、ありがとうね。
ごくごくごく。かわいいね。



どうでしょうか。自然と、上記の特徴をもった語りかけ方になりませんか。これがマザリーズです。マザリーズは習得するものではなく、人が自然に使うもので、性別や国や文化に関係なく現れるのだそうです。

赤ちゃんは、平坦で抑揚を抑えた語りかけよりも、高い声で抑揚のあるマザリーズを用いた語りかけによく反応すると言われます。また、マザリーズは子供にとって模倣しやすいものです。そして、養育者はマザリーズを用いることによって、子供の注意を喚起しコミュニケーションを図っているのです。そして、そのことが、子供の言葉の発達に大きく貢献するのだそうです[1]。

では、聞こえない・聞こえにくいお子さんを育てる場合、マザリーズはどのように用いられているのでしょうか。

近年、大人が分かりやすいように、マザリーズを用いると、その特徴的な語りかけに対する感受性の高さを、赤ちゃんは生まれながらに備えていることが分かってきました。そして、赤ちゃんは、視覚から特徴のある刺激が入った場合も、同じように受け止める力を備えていることが判明してきたのだそうです。

このことに関して興味深い研究がありました。成人ろう者が、聞こえない・聞こえにくい赤ちゃんに手話で語りかけると、自然とゆっくりとしたテンポで、一つ一つの手話単語の動きを普段より大きく行うそうです。この様子を撮影した動画と、ごく普通に手話を行っている動画を、また別の聞こえない赤ちゃんに見せると、やはりマザリーズの特徴を含んだ手話の方を好んだとのことでした。さらに、手話を一度も目にしたことのない聞こえる赤ちゃんに、その2種類の動画を見せても、やはりマザリーズの特徴を含んだ手話を選んで注意を向けたとのことでした[2]。つまり、聴覚からの入力と視覚からの入力の両方で、マザリーズ(マザリーズの特徴を含んだ手話)での語りかけの方に、赤ちゃんが大きな注意と関心を向けたことが分かったのです。

赤ちゃんは生後6か月ぐらいに、相手から語りかけられた言葉には何やら意味があるということに気付くそうです。ですから、おっぱいやミルクを飲ませてもらうときに「ごくごくごく、おいしいね。」おむつを替えてもらうときに「きれいにしようね、ふきふきしようね。」抱っこをしてもらいながら「〇〇ちゃん、かわいいね、だいすきよ。」などと話しかけられることは、相手がどのように自分に関わってくれるのかを知る・受け止める機会になっています。こうしたコミュニケーションの最も基本的で重要なことを、赤ちゃんは学んでいるそうです[3]。

赤ちゃんの注意をより引き付けるといふ、マザリーズやマザリーズの特徴を含んだ手話を、ひよこ・ことり組のお父さん・お母さん方は、既に自然にされているかと思いますが、夏休み明けの9月は、改めて、お子さんへの語りかけ方を意識してみる良い機会かもしれません。

【参考文献】

[1]「今後の養学校乳幼児相談室への期待と展望」原田公人(平成30年度関東地区聾教育研究会 乳幼児教育相談研究会 講演資料)

[2]「言語習得における身体性とモジュール性 —聴覚障害とウィリアムズ症候群の場合の比較を通じて—」正高 信男(<https://www.crn.or.jp/LABO/BABY/LEARNED/MASATAKA/>)

[3]「言葉の発達とその規定要因」秦野 悦子(第二十四回 母子健康協会シンポジウム(http://www.glico.co.jp/boshi/futaba/no68/con05_04.htm))

(文責:神谷)

